5-2-2　人文学部の特色とねらい

人文学部は，古代ギリシアの自由学芸（artes liverales）の理念に淵源を持ちます。自由学芸は，ローマにおいて，文法（Grammatica），修辞学（Rhetorica），弁証法（Dialectica），算術（Arithmetica），幾何（Geometrica），天文学（Astronomia），音楽（Musica）の７科に整備されました。この自由７科は，教会（修道院）において育まれ，西欧中世に誕生した大学（universitas）において，あらゆる学問の基礎として教養部に根づいたのです。教養部は，18 世紀から 19 世紀にかけて，ドイツの大学において，「学問の自由」（akademische Freiheit）を象徴する哲学部に変容し，専門予備学的な教養諸科を教授するだけでなく，それ自体，哲学，歴史学，文献学といった専門的な研究分野を擁する学部に生まれかわりました。教養部と専門学部というふたつの性格をあわせもっているという点では，人文学部は，哲学部の系譜に属すると考えて差し支えありません。

人文学部生は，その課程において，「何のために，何を学びたいのか」という課題意識を先鋭化させ，４年間の学習過程の最終段階に位置づけられた卒業論文・卒業研究に向けて，みずから積極的に学習過程を設計する必要があります。学習要求の多様化に対応するために，フリーゾーンを設定していますので，学生は，さまざまな科目群から，各自の志向，問題関心に応じて，より自由に選択的に履修することができます。

人間関係学科社会学専攻、教育学科、英語英文学科という専門分野の研究は、ゆたかな教養や知的生産の技術にうらづけられて、はじめて熟成し、卒業論文・卒業研究として実をむすびます。人文学部が４年間の一貫した学習課程を志向するのは、こうした理由によります。

すでに，生涯学習の時代が到来しています。大学における４年間の学習は，社会における実践的な学習の基礎として位置づけられます。大学においては，専門分野の学才，ゆたかな教養，創造的で，柔軟な思考力・行動様式，知的生産の技術を身につけ，みずから積極的に諸課題にとりくむことができる問題解決能力，資質を培うことが重要になっています。なお，人文学部生は，教員免許状等の資格・免許を取得することができます。自分の将来をしっかり見据えて，このような制度を有効に活用することが大切です。

１.人間関係学科社会学専攻の特色とねらい

◆社会学とは？

今から約 200 年前，オーギュスト・コント（フランスの哲学者・社会学の祖）が『実証哲学講義』で la　sociologie という言葉を 19 世紀初頭に初めて用いたことによって，「社会学という学問は誕生した」と言われています。

Ａ.コントは，「社会に関するあらゆる領域の学問を統合した総合学問」として構想しました。社会学を「予見するために観察し，予知するために予見する」学問としたＡ.コントの名言は，明快な表現である一方で，安直な解釈を許さない重厚さも有しています。「まだ物事が現れないうちに，それを観察によって察することで，何が起こるのかを前もって知る」ということは，具体的にどうすることを意味しているのでしょう？　私たちは，「徹底した観察や調査を積み重ねることによって，これから起こるであろうと推察した物事（＝現代的課題）に関わるのが社会学という学問の使命である」と解釈しています。

すなわち，社会学とは，「社会を生きる人々が直面する多様な社会現象（出来事・問題・事件など）から人間社会が抱える現代的課題を科学的に解明していく学問」です。

◆現在進行形の学問

社会学という学問は，多様な社会現象をとらえるために，様々な方法論を築き上げることによって発展してきました。そして，現在にあっても社会学は，現実の社会現象をとらえようと躍起になっている現在進行形の学問です。

◆五つのＣ

多様な社会現象は，相互に関連する五つの領域として分類できます。そして，これらの領域は，英語の頭文字をとって五つのＣで表すことができます。

① Culture＝文化は，ファッションやスポーツ，産業や消費，流行や伝統など，人間が経験的に創り上げていく領域を表します。

② Career は，日本語で経歴や職業・仕事などと訳されますが，労働だけでなく，人間の日常生活全般に関わる知恵，技術，社会政策などを応用する領域を表します。

③ Communication は，情報やメディア，社会意識や感情など，対人間関係に関わる領域を表します。

④ Common は，日本語に訳しにくい英語ですが，あえて訳すと〈共〉となります。人種や民族，セクシュアリティやジェンダー，リスクや安全，危機や安心，親密性や戦争など，他者と共に生きる人間社会が抱える課題を不断に探求する領域を表します。

⑤ Contemporaneity という見慣れない英語は，日本語で現代性のことです。変化や一時性，グローバリゼーションやボーダーレス，移住や移動，格差や雇用不安など現代社会に特有の問題領域を表します。

社会学専攻では，これら五つの領域を有機的に理解しようと試みます。

◆明快であること／当たり前でないこと

アメリカの社会学者ランドル・コリンズは，『脱常識の社会学』という本の冒頭でこんなふうに言っています。

> 「どんな学問も次の二つのことを目指さなければならない。すなわち，明快であること，そして当たり前でないこと，である。本当の知識は伝達できるものでなければならない。つまり，人に分かるように言い表すことができなければならない。しかも，何か言うに値すること，これまで知られていなかったことで，それを知れば知る前とは何かが違ってくるようなことがそこに含まれていなければならない。」

◆三つの教育目標

Ｒ.コリンズの言葉に，社会学専攻の教育目標は，集約されていると言ってもいいでしょう。

第一に，社会学を学ぶことによって，これまでとは違った「社会の見方」を身につけること。

第二に，その「社会の見方」を他の人々に理解してもらえるような理論的（社会学的）な説明力を身につけること。

第三に，社会学を学ぶことを通じて，自分自身が身につけた「社会の見方」を，自分自身がこれから生きていく社会に活かし，さらに，自分自身の将来と未来の社会を切り開いていくことに役立つような知識と方法を見つけ出していくこと。

これらの三つが，社会学専攻の目指している教育目標です。

２.教育学科の特色とねらい

教育学は，人間の発達と形成について探求する学問です。

20 世紀は，学校教育を中心とした制度的な教育がグローバルなレベルで普及した時代でした。わが国においても，明治維新以降の近代化にともなう学校教育の拡充のなかで，ほとんどすべての人が何らかの教育体験を有しています。その意味では，誰もが教育について何かを「知って」おり，何らかの仕方で教育について述べることができます。

しかし，そうした教育をめぐる言説のうち，教育という営みの意味と構造を客観的に分析しているものがどれほどあるでしょうか。教育は，理論的・抽象的に論ずることもできますが，結局は具体的な実践に還元されて意味を持つことであるために，ともすれば私的・主観的な体験が一般化して語られる傾向があります。

また，これとは逆に，ある教育についての考え方が，いつの間にか最初の理想からずれて，人間性の開化を阻害することもあります。たとえば，私たちが進学や資格取得で受ける試験という制度は，元々は誰もが努力次第で自己実現の機会を得られるようにするために導入されました。しかし，今日，試験は学校とその文化に適合した人材を選抜するシステムとして機能していると指摘されています。

こうして，教育について深く考えることができるようになるために，二つの課題が見えてきます。ひとつは，日常生活の経験から得られる私的な教育言説を見直すことです。もうひとつは，社会に受けいれられているかのように思われる教育言説を「本当にそうなのか？」と見直すことです。

さて，「教育」というと，すぐに学校・先生・教科書などが連想されるでしょう。しかし，教育は人間にとって本質的な現象です。ゆえに，教育の研究対象は，幼児－児童－青年－成人－高齢者という時間軸においても，家庭－学校－社会といった空間軸においても多岐にわたっています。そして，教育にアプローチする方法論も哲学，心理学，社会学，歴史学，政策学等にわたります。

教育学科は，「人間の発達と形成」に関して誕生・成熟・死に至る時間的連なりと，家庭・学校・社会に関わる空間的広がりにおいて理解する学際的・総合的視点からの教育を行い，現代の教育と人間形成に関する諸問題に対応した教育観と教育実践力を備えた人材を養成することを目的としています。

３.英語英文学科の特色とねらい

英語英文学科のめざすもの，それは何よりもまず優れた英語力を身につけることにあります。

日本で生活をしながら英語を習得することは，それほど簡単なことではありません。何しろ，日常生活はすべて日本語を介して行われているわけですから，それ以外の言語は基本的に「お客様」でしかありません。つまり，時々しか会うことのない，また会ったとしてもなかなか腹を割った話のできない相手でしかありません。

「お客様」を「友達に」，それもできれば「親友」にすること，それが言語習得の第一歩です。毎日会い，話をすること，そこからしか英語との「友情」は育てられません。時には喧嘩をして顔を見るのも嫌なときがあるかも知れません。それでも会いに行くのです。英語英文学科では，この「毎日会いに行く」ということを強要します。なぜなら，それなくして優れた英語力を身に付けることなど，到底不可能だからです。

ただ，会いに行くにも近道があります。その道案内をするのが「授業」です。特に４技能を中心とする基礎科目は，絶対不可欠な道路標識です。標識も知らずに車を運転しては危険です。また，危険なドライバーを社会に出す（卒業）わけにはいきません。英語英文学科がめざすのは，優れた英語力を持つ安全なドライバーなのです。

なお，実地訓練のために，アメリカやイギリスに行くこともできます。一ヶ月程度のプログラムから中・長期のプログラム，そして交換留学による一年間の留学など，海外研修の道は広く開かれています。ただし，これも標識を覚えたうえのことであることは言うまでもありません。

さて，言語は標識（ルール）だけで成り立っているわけではありません。それは，その言葉が使われている国の広い意味での「文化」に支えられているのです。英語英文学科では，この文化の中から，特に英米文学と英語（言語）学についての深い理解を求めます。もう一つ，社会事情や地域研究を扱う授業も系列的に用意されていますし，そうしたテーマについて卒業論文を書くこともできます。ただ，中心はやはり英米文学や英語学となります。英米文学や英語学は，英語という言語のいわばエッセンスともいうべきものであり，第一に掲げた優れた英語力の習得もこの点を抜きにしては考えられません。両者は，あくまでも，表裏一体をなすものなのです。「優れた英語力を土台とした英米文学や英語学についての深い理解」，それが広島修道大学英語英文学科のめざすところです。